
イレブンナイン

向日アオイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イレブンナイン

【Zコード】

Z6908A

【作者名】

向日アオイ

【あらすじ】

少年、志筑と少女、こより。一人の周りは、彼らの 同族 に溢れている。生まれた瞬間から、未来を決められた 対魔班 たちの 思いとは?彼らは、果たして運命を打ち破ることができるのか?

0 0 0 · 1 a 1 a 1 a · ·

涼しげな歌声を頼りにし、彼は無意識に公園へと足を運んでいた。

1 a 1 a 1 a . .

歌詞のない、単調な歌であった。空を白ます朝日の真下、彼は歌声の主を探す。滑り台の下を抜け、そのまま急上昇。一陣の風となつて砂塵を舞わせた頃には、もうジャングルジムの上空で目標を発見している。

(見ツケタ……)

彼の通つた入り口から見て一番奥、砂場の隣にはベンチが設けられていた。他の遊具と合わせてか、パステルカラーに染色された可愛らしいベンチである。そして、そのベンチの上にもまたパステルカラーの可愛らしい少女が座っていた。

パステルカラーの。

少女。

彼は、先ほどとは逆に急降下。そのままの勢いで駆けると彼が同化した空気が風を作り出す。そのままそれは彼と共に少女へ向かい、少女の長い髪を軽く搔き上げた。

灰色の髪が、ふわりとなびく。

そして、彼はそれを見た。少女のうなじに、確かに。

アクアマリンの宝石が埋め込まれている、その様を。

(フ、ハハツ……)

どこからともなく笑いが込み上げる。彼は大声で笑つてしまひたかった。しかし、それは不可能なことである。

何故なら、彼は今、空氣であった。

彼は空氣と同化しているのであった。

空氣には、口もなければ喉もない。声が出せないのは当然で、そんな状態で周りに聞こえる笑い声を上げられるはずもなかつた。

1 a 1 a 1 a . .

何も知らないのであろう。少女は歌い続けていた。先ほど垣間見えたアクアマリンの宝石のように、澄みきつた歌声である。今度は自然の風に、灰色の髪が再び揺れる。何やら楽しそうに、宝石と同色である空色の瞳は細められていた。

(ナント、美シイ……)

髪の色に、瞳の色。

それぞれが、ここまで宝石に影響された 対魔班 を、彼は今まで見たことがあつただろつか。

(コレコソガ、我ノ欲スル最大ノ力……)

無意識であつた。彼は徐々に少女へと近付き、触れようとする。

(我ヲ……、帝へ導ク力……)

そして、触れるその直前で、

彼の動きはぴたりと止まつた。

1 a 1 a 1 a . .

少女の歌声は、単調に同じメロディを繰り返す。終わりを知らない、永遠の歌。

(何ト……、言ウコトダ……)

彼は思わず呆然と立ち尽くした(空氣なのでその場に立てるはずももちろんないのだが)。ありえもしない事実が目の前で歌つていた。

(「コノ娘、迷イヲ、持タヌノカ……？」)

触れる直前にわずかに触れた少女の心。そこには、彼

の入り込む隙間など、少しだりとも存在していなかつた。

(何ト言ウコトダ……)

これでは……、同化 できないではないか。もつたいない……、何と、もつたいないのであろう。

(ドウニカシテ、手ニ入レラレヌモノダロウカ……)

彼 の思考はそこまで行き着き、しかし……、案が出ない。

ドウニカシテ。

ドウニカ ドウニカ ドウニカ 欲シイ 欲シイ コノ娘ガ

!!

1 a . . .

途端。

歌声がやんだ。

(ナツ……)

それは、あまりにも突然のことであった。彼 は思わず慌て、まさか自らの存在が見つかってしまったのではとうろたえた。

しかし、彼 をさらに驚かせたのは少女の次の言葉である。「そこで何をしているんです?」

思わず、身の毛がよだつを感じた。いや、正確には今の 彼 には身もなれば毛もないのだが、それだけの恐怖を確かに感じたのだ。

(見ツカツタツ……!)

彼 は覚悟を決めかけた。 同化 を見破られてはおしまいである。しかし、決めかけた、その瞬間に

「早く入つたらどうです、悠希くん」

少女の口から、またも思わぬ言葉が飛び出した。

……悠希くん?

(ナツ……?)

混乱する 彼 のことなど全く構いなしに、すりくと少女は立ち上がると、入り口の方へ大きく手を振る。

そこで 彼 はようやく気付いた。なるほど、こんな朝早くして、ただ歌を歌いに公園へ来たのではあるまい。

そうか。……そう言つことか。

(待チ合ワセ……)

少し遅れて 彼 は少女の向く方へ振り返る。そして、にたりと笑つた(つもりになつた)。

だいぶ遠いが、それでも解る陰湿っぷり。何とまあ、この少女とは正反対なほどに心に隙間を持つ少年が、そこには立っていた。

一気に希望が見えた。それを確かに 彼 は感じた。

少年は、やれやれ、とでも言いたげに溜め息を吐き、そのまま氣だるそうに歩いてきた。少女の隣に少年が並ぶと、少女は、「遅いですよ。三十分も待ちました」

にっこりと、輝かんばかりの笑顔で言つた。少年が、溜め息を吐ぐ。

「お前が早すぎるんだろ。まだ五分前だ」

「はあ。五分前行動とはまた……。まったく、どこの小学生ですか。女の子を待たせないよに先の先を見て行動するのが立派な男の子つてものですよ?」

「……」

呆れつつも、諭すような少女の言葉。少年は再び溜め息を吐く。相手が反論しないのを見るや否や、そのくらいのタイミングで、少女は一気にまくし立てた。

「大体ですね、悠希くんにはこの心つてものが解つてないんですよー。普通、男の子とお出かけするときの女の子と言つのは、多少なりとも張り切つて、早めに家を出るものなんですー。それを見越して、自分が待つのも気にせずに約束の一時間くらい前にはー、ベビベビベビベビ。ベビベビベビベビ。

(サテ……)

彼 はもう、少女と少年のやり取りに興味など示していなかつた。
ただ、二人の姿だけをまじまじと見つめる。

灰色の髪に、空色の瞳を持つ少女。歳は、十代半ばと言つたところか。

そして、同じく十代半ばくらいの少年。焦げ茶の髪に、同色の瞳。
……宝石、は？

(……アソコカ)

彼 の視線は、少年の右腕へ移つた。黒い、レザーのリストバン
ド。手首につけられたそれは、宝石を隠すものだと思われた。

(取リアエズ、でーたヲ拝見サセテモラウカ)

そして

「ひや！？」

「！」

彼 は、猛スピードで一人の間を駆け抜けた。強風に二人の会話
が止まる。

ピツ ピツ

二つの電子音。これは多分、彼 にのみ聞こえたことである
う。彼 が止まるとそこはすでに公園の入り口で、彼 はその
場でデータを開封し始める。

『DATA LOADING LOADING . . .
.』

ピツ

『NAME . . . 悠希志筑 JUEL . . . opal
AGE . . . 15 ID . . . 324322-Y』

(ユウキ、シヅキ……)

……。オパール。オペールか。アクアマリンじゃなこと言つて
は、あの少年の方なのだろう。

(おぱーる、アノ髪ト瞳……)

まあ、つまりは。

あの少女の方が価値がある。

『DATA LOADING』
. . .

彼は残ったもう一つのデータに手をつけた。価値のある、少女のデータ。

「あーもうつ、髪がパサパサですつ。悠希くんのせいでですよっ！」

少女が怒鳴るように言つ。パサパサ、と言つのも、先ほどの強風による砂埃が原因であろう。

「おれのせいはないだろ。風に言え、風に正論である。少年志筑はクセなのか、また溜め息を吐いてい

る。「知つたことじゃないですよ！ 悠希くんされ遅刻しなければ、こ
うはならなかつたんです！」

「遅刻した覚えはないんだが……」

志筑はまた溜め息。少女も、つられるように溜め息。そして、
続けて言つた。

「とにかく、行きますよ。唯さんたちが待つてているかもしません」

そして、さつと歩き出す。数歩歩いて振り返ると、

「ほら悠希くん、早く！」

にこりと笑つて手招きをした。

「……」

はあ。

溜め息。志筑の溜め息は、これで何度目だろ。マイペースに歩き出し、志筑は少女の後を追つ。

ピッ

ほぼ同時に、データの開封が完了した。彼は、それの隅々まで、目を通す。

「遅いですよっ、悠希くん！」

跳ねるよしひこ、少女は公園を飛び出した。また振り返り、少年を待つ。

『NAME . . . 水島こより JUEL . . . aquamarine
AGE . . . 15 ID . . . 258592 - M』

少女 こよりは、灰色の長髪を揺らりつつ、志筑を待っていた。

+++ + + +

サテ。

基本情報ハ揃ツタガ、マダでーたガ足リヌヨウダ。
シバラク、観察サセテモラウカ……。

志筑たちの住む小さな町から、バス、電車と乗り継いでおよそ一時間。

そこは、のどかな町とは正反対の、いわば都会であった。

県庁所在地の真ん中、本当に、県庁の所在するその地域。デパートもあれば、カラオケ、他の量販店、何でもかんでも立ち並ぶ。広々としたメインストリートを横切る、広々とした横断的歩道を一人は歩いていた。

「あ！ 次はアイスを食べましょー！」

「……」

限りなく、正反対のテンションで。

志筑は深々と溜め息を吐いた。朝ここに着いてから、朝ご飯だと言つて超有名ハンバーガーショップにてハンバーガーとシェイクとフライドポテトを購入し、その場で食べたばかりなのだ。いや、それだけなら構わない。問題はこの女、先ほど美味しそうだと言つて、クレープやらワッフルやらをとても楽しそうに咀嚼していたのだった。

志筑のお金で。

そう、最大の問題はそこだ。買つぶんには何も文句は言わないが、この女、先ほどから何かと志筑に請求してくる。それは、何故か。

（女の子の夢、とか言つてくるんだろうな……）

伊達に、少女と付き合い始めて十数年生きてない。相手の言いそうなことも予想がつく。
……が、そんなことができてもまったく嬉しくない。それが現状。

「悠希くん！ 抹茶とかなら、食べられるんじゃないですか？」

横断的歩道を渡り終えると、そこは大型デパートの真下である。

その、大きな入り口の前で立ち止まつ、しょつけめぐりと振り返つた。とても楽しそうな笑顔である。

「……遠慮する」

「えー！ 何ですか？ どうしてですかー？ 美味しいですよ、アイス……」

「別に、おれが食べなくとも。お前だけ食べてくればそれでいいだろ」「よくないです！」

笑顔も一転、ここまではくると、怒るを通り越してかなり拗ねた顔になる。会話の流れの関係で、口ロロロと表情が変わるのがこの少女だ。志筑はまた溜め息を吐き、

「おれは、腹は空いてない」

結構さらりと言ひてのけた。

「……じやあ、いいです」「……じやあ、いいです」

しかし、これは予想外だつた。まさか諦めるとは思つていなかつたのだ。少し哀しそうに溜め息を吐いてから、ぐもんと店内へ身体を向ける。

嫌な予感がした。

何故、諦めたのに店内へ向くのか。

「じゃあ……、ゲームセンターへ行きましょー！ ここのは醴江、新しくできたらしいですよー！」

再び、くるん。振り向いた顔は、先ほど以上の笑顔である。

にこにこ。

にこにこ、にこにこ、にこにこ。

「……解ったよ

はあ、と志筑は溜め息を吐く。何かに敗北した気がしてならない、そんな瞬間であった。

「わあー、悠希くん、ありがと「じやこ」ます！」

パン、とこよりは手を打ち鳴らした。上機嫌である。そこまで

喜ばしいことだったのだろうか。よく解らない。

志筑は、珍しく先導を切る形でデパート内に踏み込んだ。ひやりとした冷気が肌を撫でる。そう言えば、もつすぐ夏かと頭の中でぽんやり考え、自らの季節感のなさに溜め息を吐く。

「じょりが隣に並んだ。

「七階ですよ？」

「解つてる」

短い会話のちに、志筑は近くにあるエスカレーターへと踏み込んだ。もちろん、上階へ向かうエスカレーターである。じょりもあとに続いた。

- 一階、生活品のコーナー。
- 三階、衣料品のコーナー。
- 四階、本とCDのコーナー。
- 五階、玩具と文具のコーナー。
- 六階、雑貨のコーナー。
- 七階、ゲームのコーナー。

到着。

エスカレーターを降りた瞬間、他のフロアよりも、このフロアの温度が一、二度高い気がした。

「悠希くんっ、早く！」

こよりは本当に上機嫌である。弾むように、アーケードゲームのコーナーへと入り込む。志筑も渋々付き合って、少女のあとを追いかけた。

格闘ゲームに、音楽ゲーム。レーシングゲームや射撃ゲームなんでもあれば、誰が遊ぶのかよく解らない、アニメのキャラクターのゲームもある。

適当に眺め回しただけだが、一言いアーケードと言つても様々である。様々なゲームへ集まる人々を見ながら、何がそんなに楽しいのかと首を傾げた。

（……あいつは……？）

再び辺りを見回す。一度、二度、三度。灰色の頭は見当たらぬ。

い。奥へ行った可能性があるなど、仕方なく志筑も足を運ぶ。

きょろきょろと、見回しながら店内を歩く。いない。壁に突き当たつたので振り返り、再び入り口へ。まだ見つからないので、どうするか、と考えたところで、アーケードのコーナーからクレーンのコーナーへと移動する、灰色の髪の後ろ姿が見えた。

(……いた)

追いかけよう、と思つたが、嫌な予感が足を止めた。クレーンゲーム。こよりの性格を考えても、嫌な予感がない方がおかしい気がする。

(……九時一十六分……)

壁の時計へと、視線を上げて溜め息。そして、結局こよりを探しに歩み出す。同じ形のクレーンゲーム本体が並ぶその中を、灰色の髪だけを探して進んだ。

(……いた)

「によりは、かなりあつさつと見つかった。じっと、恨めしそうに」とある一つ眺めてくる。

嫌な予感、倍増。

話しかけるか、否か。本気で悩んだ。しかし、

「あー、悠希くん!」

あちらから、こちらに話しかけてきた。

「これ! 見てくださいよ!」

見るだけじゃダメなんだろうかと、溜め息を吐きつつ志筑はその機体へ、

歩み寄つて、立ち止まつた。

隣では、によりがにこにこと、何かを待つてゐる。……この場合、気の利いた反応なのだらうが。

「何だこれは……」

志筑には、呆れてそんな声を漏らすのが精一杯であつた。機体の中には、ぬいぐるみ。クマや、イヌや、ウサギや、ネコ。そこま

では、まだいい。

カエル。

まあ、これもまだいい。

色が、すべて黒と赤の一色使い。

これは……、さすがに問題であろう。

「クマさん、可愛くないですか？」

「……」

返す言葉もない。

「悠希くん」

「よう、こいつは、こいつと名前を呼んだ。嫌な予感が、一晩くらいいの規模で現実になるのを感じる。

「クマさん、取ってくれますか？」

「……せっぱり。

呆れた溜め息と同時に顔がひきつるのが解る。堅い動きで頷くと、ありがとうございます、と最上級の笑顔が返ってきた。

「どうや、今日で一番嬉しい出来事だつたらしい。

もう、溜め息すら吐く気になれずに志筑は黙つて財布から硬貨を一枚取り出した。あれだけ奢ったと言つのに、まだ財布には大層な金額が入っている。これは、志筑の物欲のなさが作り出した言わば產物であった。

チャリン。金属質な音が手元で鳴った。じつと目標を眺め、ボタンの位置も確認。慎重に、ボタンを押しにかかる。

まずは左。そして、奥。

クレーンの爪が、クマの身体をがっちり掴み、そして、
がたんつ。

「わ！　すごいですっ、悠希くん！　！」

「こよりが素早く出口から人形を取り出した。赤と黒のクマ。こ

よりとは、まるで正反対な色合いだ。

「これ、もうつてもいいですかー？」

「おれはこりない」

「ありがとうございますっ！」

はしゃぎ少しだけ赤くなつた顔が、満面の笑みで辞儀をする。

深々と、よほど嬉しかつたらしいなと考へて、

「時間だ。行くぞ」

思い出したように咳き、早々と歩き出した。

「えつ、ちゅ、悠希くん！…」

「」よりの慌てた声が聞こえる。パタパタと、足音。こちらに追いつくと、ブスッと拗ねた口調で咳く。

「何も、置いてくことないじゃないですかっ」

「時間切れだ。今から行かないと間に合わない」

「……え、もうそんな時間ですか？」

「」よりは慌てて自らの携帯電話を取り出し確認し出す。白い携帯電話。桃色で、質素なストラップがついている。

「三十分……」

「少し、急いだ方がいいな……」

「」よりの言葉を聞いて、志筑は素直にそう思つ。

「そうですね」

「」よりも首肯した。

「唯さんを待たせてはいけませんからね」

「ああ」

領き、下りのエスカレーターに乗り込む。そこで、ようやくこのよりの言葉に疑問を持った。

唯さんを待たせては

これから会うのは、神崎唯と和泉俊樹。一人だ。そこで、敢えて『唯さんを』。さて、意味はあるのか？
（……考へるまでもない、か）

そう。考へる必要は皆無であった。

俊樹は遅刻の常習犯。まあ、学校でさえそつなのだから、プログラマーがそうでない可能性など、低くしか考へられなかつた。

それに対しても、唯は待ち合わせには早めに到着したがるタイプ。

まあ、 こよつの限定も当然か、 と思える。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6908a/>

イレブンナイン

2010年12月5日14時57分発行